

---

# 俺は弟に恋をする。

天照

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は弟に恋をする。

### 【Zコード】

Z5657M

### 【作者名】

天照

### 【あらすじ】

同性で、血の繋がった実の兄弟で……  
許されないことだと分かってる。  
きっと受け入れてもらえない。きっと認めてもらえない。  
それでも、こんなにも好きで。自分以上に大切だと思う。  
この気持ちはどうしようもない……。

正造、由紀、秋子は三人兄弟。母子家庭で育つたこともあり、三人

で寄り添い助け合いながら育つたため、とても仲の良い兄弟だった。そのおかげで、長男の正造はブラコンで시스コン。弟と妹を異常に可愛がつてはいたが、あくまで仲の良い兄弟だった。弟とキスをするその日までは。

最初は酔つた勢いの小さな出来事。だが、それが抑えられていた思いを加速させ、その日を境に兄と弟は一線を越え始める。

ノンフィクション。

## キス（前書き）

この作品には男性同士・肉親同士の恋愛描写がありますので、苦手な方はご注意ください。

&gt; . 1 9 1 8 5 — 1 3 7 7 &lt;

誰にもこんなことは話せないし、相談なんてできない。せめて血が繋がってなかつたら、できれば女の子だつたなら……なんて現実逃避してゐる。

始まりは十一月の「」。飲み会帰りの夜遅く、時計の針が午前二時を過ぎようとする頃、ようやく俺は家へと帰つた。

春から始まる就職活動に対する不安からか、つい飲み過ぎてしまつたのだが、玄関先で大騒ぎをしてしまつても、優しい弟はいつものように俺を出迎えて介抱してくれた。そしてそのまま酒盛りの雰囲気になり、弟の部屋で一人で飲むことになった。

由紀は毒舌だけど憎めない奴で、甲斐甲斐しくこうして酔つ払つた俺の面倒を見てくれる、可愛い弟だ。

一人で他愛もない話をしながらビールの缶を五つ六つほど空け、なんとなくつけっぱなしにしていたテレビの深夜番組を見ていると、ゲイのお姉さんたちが登場して盛り上がる場面に。そこから自然と話題はゲイつてありか?という話になつた。

もちろん合わせたようにナシだつて話になつたし、由紀は何度も「そんなキモいのありえない」と繰り返していた。

だが、もともとブランコだった俺は、酔つていたこともあり、酒で頬を赤く染めた弟を可愛いと思つた。単純な人間なので、思つたことが口から全部出でてくる出でてくる。

「お前可愛いな」

「兄ちゃんはいつもそれだな」

笑いながら由紀はせりつと受け流したが、酔っ払つてゐる俺はせりつに続けた。

「こやこや、マジで今田は可愛い。せりつ辺の女子より可愛い。どうしてくれよりか」

女よりも男に告白される回数が多い高校二年の弟は、身長が俺より一十センチ近く小さいし、体も細身で柔らかい。俺なんかとは違つて、本当に女の子のように整つた可愛らしさで顔立ちをしてくる。ちなみに俺はイケメンじゃないし、残念なことにいままだ告白されたこともない。兄弟でこの違いはなんなんだ、と思つてしきりだ。

「あははは、どうしてくれんの?」

「キスしてやるよ」

もともと飲んでいた上にせりつアルコールを追加した俺のテンションは最高潮。なんでも出来る気分だった。

「え、マジかよ。童貞のやせしてできるのかよ」

お互いのことをよく知つてゐる兄弟ならではの的確なツッコミが五十へこみつつも、強引に肩を抱き寄せて顔を近づける。

「じいちゃんよ。オラオラ、こっちに来いや~」

「ふざけんなよ。男なんて気持ち悪い、兄ちゃんなら更にキモい」

抵抗して体を引き離そうとするが、その肩はがつちつと掴まれ放されることはない。

更に近づく俺、面倒になつて離れるのをやめる弟。重なる視線、

重なる吐息。そして……

キスをしてしまった。後に聞いたところによると、ビーナスアーツ  
ーストキスだつたらしい。余談だが、俺のファーストキスは合コン  
で酔つた勢いに任せてたまたま隣に座っていた女の子としたもので、  
酒席では何度か友達とキスしたことがある。それも男女構わずに。  
きっと酔つとキス魔になるんだと思つ。

冷や水を打つたように静かになる室内。由紀がびっくりした顔を  
こちらを見ている。黒くて大きな瞳が俺を見つめていて、心なしか  
潤んでいるようにも見えた。頬を桜色に染めて、じつと俺を……。  
まっすぐに結ばれた唇は厚ぼつたく熟していて、それを見て思わ  
ずもう一度キスをする。

もうテレビの番組なんかとつぶくに終わつていて、あの虹色の縦縞  
の画面に切り替わっていた。由紀はちょっと泣きそうになつていて  
し、正気に戻つた俺も涙目だつた。血の繋がつた兄弟にキスしたの  
だから、酔いも醒める。

「……」

「……なんというか、すまなかつた」

顔を背ける弟。淀んだ空氣に死にそつた俺。こんな時でも膝をじ  
つと見つめるその様を愛おしく感じて、再び湧き上がる気持ちを抑  
えるのに苦労した。

「兄ちゃんはや、わいこつ人なの？」  
「それってどうこつ……」

すると弟は少し怒つたように答える。

「平氣で兄弟にキスできるヤツなのかつてこと。まさかあーちゃん

にもしてんの?」

あーちゃんといつのはは由紀より一歳年下の妹、秋子のこと。俺たちは三人兄弟で片親だった上にその親も年中働き通し。小さい頃から三人でいることが多かつたから、自然と兄弟を思う気持ちが強くなつた。俺が守つてあげないと、といつ使命感に燃えていた。

そんな訳でパソコンもある俺は、妹のことももちろん可愛いとと思うし大好きだつたが、当然キスなんてしたことないし、しようと思つたこともない。

「まさか! それはねえよ!」

だから全力で否定した。

「ならいい」

そつそつとなく言つと、由紀は再び視線を逸らす。そんな弟を前にして、俺は横目で壁にかかつた時計を見ながら、内心焦つていた。それも先ほどのキスとは別のことだ。

実は、次の日朝早くからバイトがあり、できればそろそろ部屋に戻つて眠りたかったのだが、なんとも氣まずい雰囲気で、とてもそんな状況じゃなかつた。部屋に戻つたとしても、翌朝起きてどう顔を合わせればいいのかと悩んでいたのだが……。

かなり目が泳いでいたんだと思う。そんな俺を見かねたのか、ふと笑顔を見せた由紀が言つた。

「戻ればいいじゃん。俺は今日は徹夜するから、気にしないで寝りやいいよ」

「つか、マジ。サンキュー」

助かった。そう思い回復したテンションで、立ち上がり意気揚々と部屋に戻ろうとするが、由紀も立ち上がり俺を見上げるもんだから、なんだろうと思いつつ視線を合わせた。

まだ酒の残り香が弟にはあって、妙に色香があるというか、ほっぺたもほんのりと赤かつたし、可愛かった。思わずその姿を見てほんやりとしてしまう。

「馬鹿だな兄ちゃん、カワイイ」

するとそういうて、今度は由紀の方からキスをしてきたのだ。もう何も言えない。頭の中が真っ白になつた。思考停止。こういう時に「お前の方が可愛いよ」なんて言えないから、俺は童貞なのがもしけない。

「兄ちゃん俺のことが可愛いって言つたが。兄ちゃんの方が可愛いよ。なんで人がほつとくのかつて思つてらっしゃ」

弟はまだ酔つてゐのかもしれない。そんな恥ずかしい台詞を実の兄に言えるぐらいだから。

「カワイイよ、兄ちゃん。……だいすき

そう言って俺を抱きしめた由紀は、再び唇を重ねてきた。本当に驚いてなんにもできなくて固まつていた俺だが、その夜はそれ以上は何事もなく、すぐに部屋へと戻つて寝た。その時はそれで終わりだと思つていた。

翌日の朝八時。セツトした田舎まし時計がけたたましく鳴り響く。

「……クソ頭痛ええ」

一日酔いの痛みをうまく例えることは難しい。経験した人なら分かるかもしれないが、ただでさえうるさい音が余計に大きく感じられる。ガンガンと頭を打ち付けられるようなあの感じ。とにかく朝から気分は最悪だった。

まあ、それはともかく。目覚ましの音を聞いて、弟が俺を起こしに部屋へ入ってきたのだが……

「おはよう兄ちゃん」

そう言ひやいなや、なんといきなり笑顔で目覚めのキスをしてきたのだ。漫画やゲームならともかく、まさか実際にそんな体験をするとは思わなかつた。しかも血の繋がつた弟相手に。そしてその日から、俺たちの誰にも言えない秘密の関係が始まつた。

## 変化

妹がいる時は三人で過ごしているが、部活で遅いことが多いから基本的に弟と二人でいる時間が長い。朝は由紀の……ゅうちゃんの口付けで起こされ、妹や親の目を盗んで色々な場所で唇を重ねた。夜は一緒に布団で寝た。ただ、あくまでキスだけの清い付き合いだったが。

一週間ほどで俺にも弟とキスするとか抱きしめるという行為に違和感がなくなってきた。もしかしたら流されやすいのかもしない。そして小柄で可愛い弟は、俺のことを「兄ちゃん」ではなく「ショウちゃん」と呼ぶようになった。

しばらくなはそうやつて付き合ってきた俺たちだつたのだが……それは三月の初め、いつものようにベッドの上で抱き合いながらイヤイチャしていた時のこと。なんと突然、弟に押し倒されたのだ。正直、弟と一緒にベッドで寝ている時も勃起なんてしなかつたし、自分である時ももっぱら女性をオカズにしていた。弟でそういうことを想像すると思いい気がして試したことはない。

だが、由紀は違っていた。たまに起つてるのはなんとなく分かってたし、俺に欲情してゐるのも感じていた。

「ちょ……」

「ショウちゃん、ショウ

目がマジだった。本気で俺は犯されると思った。

「無理無理、男同士だろ？」

それを聞いた弟は、俺の股間に上で泣き出してしまった。

これまで何度もキスをしておいて、今更そんな理由で拒否するのはおかしいだろ？と、自分でも後になつて思つ。その時の俺はオロオロして、とにかく慰めるようにキスしてた。

我慢強い弟で、これまで絶対に弱いところを見せよつとましなかつたから、そんな由紀が泣き出してしまつて本当に驚いてうつむいたえてしまったのだ。

「しょうちゃんはどうして俺にキスしたりするんだよ……」

「それはお前が好きだから……」

「違うだろ！ しょうちゃんは俺のことなんか、どうせ可愛いくて弟にしか思つてないだろ！」

涙をぽろぽろこぼす弟を抱きしめる「としかできない。どうすればいいんだよ……」やつて誰とともに心の中でつぶやいた。

深夜一時くらこまで由紀はずっと泣き続けていた。俺は慰める言葉も使い果たして、背中をずっと撫でていた。ようやく泣き止んだ時に「ごめんな」と無理して笑つたから、つられて俺まで泣きそうになる。

それなのに、翌日にはいつも弟に戻つていた。昨日のことなんて何もなかつたかのように振舞うその姿に、思わず胸が痛んだ。本当に、あの可愛い弟を苦しめてる俺はどうかしてる。ただでさえ悩み多き年頃なのに。

由紀が俺を「しょうちゃん」と呼ぶのだって、兄弟といつ意識から離れよつとしてのことなんだろう。妹と話している時は俺のことを「兄ちゃん」と呼ぶのだが、恋人モードの時は由が違う。上手く言えないが、俺を見るときって表情が変わる。明るくなる。「あ、俺恋されてる。」って実感する。

俺も弟が……ゆつちやんが好きだ。でもこれは愛情ではあるけれど、恋愛感情なのか肉親としての愛なのかは微妙だ。由紀に「だいすき」と言われる度に、嬉しい反面困つてしまつ自分がいる。

俺はどうしたらいいのだろうか。この通り俺は駄目人間で、弟は実は奨学金で学校に通つてゐるような秀才で、彼の将来を考えるとこのままじゃいけないと思つ。

兄弟間で恋愛つても、本当にきついんだ。よくドラマなんかでそういう話があるけど、実際その立場になると精神的に辛くてたまらない。同じ屋根の下で暮らし育つたからお互いの小さい頃も熟知してるし、そもそも血が繋がつてゐるんだ。

肉親同士の、兄弟同士の恋愛がタブーであるということを、身をもつて知つた。

深入りは怖くて、やめるのは今だと分かつてゐる。でも……甘えられるのが気持ちよくてやめられないのか、弟が傷ついて泣く姿が見たくないからなのか。愛想尽かされて見捨てられるのは怖いけど、でもそれ以上にずるずると関係を発展させるのも怖い。本当に由紀には悪いと思つてゐる。

俺たち三人兄弟の父親は、俺が八歳の時に失踪した。もともと半年に一度帰つてくるかどうかって人だったから、俺たち兄弟は別に悲しいとか寂しいだなんて思わなかつた。

ただ、仕事も何もかも放り出して蒸発したから収入源は断たれた。借金を置いていかなかつたことだけはありがたいといつべきか、不幸中の幸いか。

三兄弟を育てるために母さんは昼夜問わず働き出し、今も俺たちのために一生懸命夜遅くまで働いてくれてゐる。

その当時の俺は長男のくせして甘つたれで、夜になると怖くなつて泣いていた。父親のことは親戚の噂話で知つてゐたから、母さんまでいなくなつてしまふんじゃないかと不安になつてゐたんだと思

う。 そうして泣いていると、一人のチビたちが寄ってきて俺をぎゅーっとしてくれるんだ。 まだミルクの匂いがするのに、「兄ちゃん大丈夫?」って気遣つて尋ねてくるんだ。妹なんかオムツも外れてないのに…… 今考えると本当に情けない。

だから、より兄弟の絆が深いというか、 そんじょそじらの兄弟より仲は良いと自負してる。

小さい頃は「兄ちゃん」つて俺にくつついて離れなかつたり、兄弟三人で狭い浴槽に浸かつたこと、俺がフラれて泣いてたら慰めてくれたこととか、綺麗な思い出がいっぱいある。弟とキスしたり抱き合つたりしてると、その思い出を踏みにじつてる気がするんだ。

同じではないけれど、母親とよく似た弟の顔、俺と同じ髪や瞳の色。それが嫌で、お洒落なんて考えてもいなかつた俺が、髪型を変えて髪も染めて、伊達眼鏡までかけた。

由紀と兄弟なんだ、と思い出す度に吐き気がおさまらない。最近は楽になってきたけど、弟が二コ二コ笑つてると、たまに小さい頃の笑顔と重なつて罪悪感でいっぱいになる。

妹を含めて、兄弟三人で話してると幸せなんだ。でも、その普通の幸福に押しつぶされそうになる。兄弟でキスしたりしてるわけだから。

せめて妹がこの関係を知らずにすむことを望みたい。そして、由紀は俺以上に悩んでるだろうと思うつといったたまれない。

男と恋愛はないとあいつは以前言つていたけど、建前か本音かは分からない。自惚れみたいだけど、俺だけ特別だつたのか。正直どうして俺みたいな男に惚れたのかは分からないが、多分弟は最初のキスのもつと以前から俺に恋心を抱いていたんだと思う。

由紀は、自分の気持ちが果たして愛なのか恋なのかすら分かつてない俺よりも確実に自分の気持ちを分かつていて、俺以上に参つていると思つ。

傷つけないでこの関係を終わりにすることはできないと思つけど、弟のためにも、その傷が最小限ですむ言葉がないか……それを探していた。

## 痛み

泣かせてしまつた日から一週間が過ぎたが、いくら考へても最適な言葉は見つからなかつた。

でも、色々と悩みぬいた結果、ゆうちゃんを大切にするし幸せになつてもらいたい。そのためにはきちんと「もうやめよっ」って言うべきなんだと……そう思うようになつていた。

弟には普通の人生を歩んで欲しい。少なくとも俺なんかと付き合うよりも、他の男と付き合う方がよっぽどいい。ゲイであつても、自分よりはるかにまともな人生を送れると思うから。

そして、お互いが休みで家にいるその日、ついに別れを切り出すことを決意した。

部屋に入った時、由紀は読んでいた漫画を放り投げて俺に抱きついてきた。擦り寄つてきて、まるで子犬のように可愛かつた。

なかなか切り出すことが出来なかつたけれど、意を決し、思い切つて口にした。「もうこの関係やめよう」って。

しつぽを振らんばかりに懐いて擦り寄つてきた弟の顔が、俺を見上げて、カツと田を見開いて、とても不安そうな表情を浮かべる。

「どうして」

そう聞いてきた。そして後は何も言わず、ただこちらを見つめたまま……。段々と田が潤んできて。無言のまま、流れる涙を拭おうともせずにそのまま泣いていた。そして俺の胸にしがみついてきた。シャツ一枚だったから、涙が染み込んで濡れてきて、この肌で弟の気持ちを感じた。……ずっと泣いているのを。ひんやりとした感触が、心の奥まで冷たくひやしていくようだつた。

覚悟してたけど、こんなに泣かせるとは思わなくて。でも、抱きしめたら駄目な気がして。視線のやり場に困つて、ベッドの上に放り出されていた漫画を見つめてた。

そしたら弟が、ふと涙でぐちゃぐちゃになつた顔を上げた。目は真っ赤でまぶたも腫れぼつたくなつて、鼻まで赤くして。それを見て、本当に心が痛んだ。

「なんだか、俺たち兄弟なんだろ。どうして……兄弟なの。それとも男だから？あーちやんならいいの？」

その問いかけに答えることができないまま、その場に立ちぬくしてたま、何も出来なかつた。その時、俺はずつと心の中で「どうしてこんな可愛い弟を泣かせてるんだ」って自問してた。

俺、兄なのに、弟に、何も、してやれない。俺も一緒になつて泣いたんだ。「めんなつて、ずっと馬鹿みたいに言つてた。

ごめんな、ゆうぢやん、「めんな。俺が兄に生まれて本当にめんな。

どうしたらいいんだろ。こんなに弟泣かせて、何したいんだろ。どうして俺ら兄弟なんだろ。

父親がいなくなつて、家が貧乏になつても、生まれてきたことを恨んだことはなかつた。

どうして、俺、生まれてきたんだる。

それからすぐ出て行つてと言われた。抵抗したが出て行かつて泣きながら怒鳴られて、仕方なく自分の部屋へ戻つた俺は、言つてしまつたことをものすごく後悔した。始めにキスしたのも俺、こうして別れを切り出したのも俺。本当に自分本位で自己中なのは分か

つてゐる。

それでも、できるなら弟にはまつとうな人生を歩いて欲しいし、普通に幸せになつてもらいたい。そのために自分ができることを考えた上での選択であり、行動だつた。それなのに、これほどまでに泣かせてしまつた。きっと深く傷つけてしまつた。

焦らなければよかつた。来月から由紀が予備校に通い始めるから、切り出すなら受験前にと考えていたし、このままどもつ居れないところまで行つてしまいそつたから、今しかない……そう思つていただれど。

もつと段階を踏んでから話をすればよかつた。自分では時間をかけたつもりだつたけど、もつともつとかければよかつた。

本当に本当に、悩んで、悩みぬいて……自分で抱え込んで。冗談抜きで、いつそ死んでしまいたいと思うようになつていった。自己嫌悪と罪悪感でいっぱいになつてゐた俺は、ポケットに忍ばせておいたビンをぎゅっと握り締めた。

## 揺れる心

泣いている顔が忘れられなくて、更に弟を傷つけるんじゃないかなって不安になつて。それでもこのままではいけないと思い、一時間ほど経つてから様子を見に行つた。幸い妹は今日は遅くなると連絡があつたので、まだ粘るつもりだつた。妹にはこんな泣きはらした顔は見せられない。

だが、部屋に行つても由紀はドアの鍵を開けてくれなかつた。名前を呼んでも返事をしてくれなかつた。

でも、ドア越しにすすり泣きが聞こえてきて……ドアの前で立ち尽くしていると、中から「ひとりにしてほしいから」と言われた。喉から絞り出すような声で。

結局俺は、その声から逃げるよつて自分の部屋へ戻つた。

俺、本当に何してんだる。どうしてこんなに弟泣かせてるんだろうつて、もう何度も田中が分からない問いを自分自身に繰り返した。どうしたらいいのか分からなくて、こんな意志薄弱な兄で、由紀には申し訳なくて仕方ない。俺が責任取らなくちゃいけない。一番辛いのはさつとあいつだから。

メールしたら見てくれるかな。そう思つて、弟の携帯に送信してみる。

「出できてみて。夕飯の支度一緒にこなすわ。」

するとぽんじなく返事が来た。

「顔崩れてるからヤダ」

さつと泣いてぐぢやぐぢやになつた顔を見せたくないんだが。そのままでも充分可愛いのに。

台所までおいでと打つてみたが、さうしても今は部屋から出たくないようだ、断られてしまつた。夕飯は牛丼でいいとメールがきたので、ひとまず近くの店まで買い物に行くことにした。

「ただいまー」

道中色々と頭の中で考えながらの外出だつたので、気がつくとあつといつ間に家へと着いてしまつていた。

「おかえりー」

由紀は部屋から出てきて居間でテレビを見ていた。

「おっ、おう！ただいま」

「お腹あんまり空いてないから後で食べようぜ」

「あ、ああ」

俺はかなりどもつて挙動不審になつてしまつたが、弟はいたつて普通の反応だつた。差し障りないつてやつ？ 気丈な奴め……。

畳に転がりながらニースを見ている由紀。こうして見てみると、体は細いし、可愛いし、なんだかんだ言つて性格は良いし、恋人なんてすぐに見つかると思つんだよな。これでお互いに他人で、さらによ紀が女の子だったら……。そういう想像を、つこしてしまつ。

弟や妹が泣くのは辛い。以前妹が失恋してきて泣いていた時は、由紀と二人でオロオロしていた。秋子を振った男を思い切り問い合わせ

めてやりたいと思った。弟を傷つけた俺も同罪だが、もうこれ以上泣かせたくはない。

このままなかつたことにした方がいいのかもしれない。前みたいに、泥酔した俺を弟が介抱してくれるような、あの頃の感じに戻れればいい。仲の良い兄弟だつたあの頃に……。

だいぶ冷静になってきた俺は、そんなことを考え始めていた。

「朝青龍って真面目に稽古しただけでも話題になるんだよな。かわいいそつ」

弟は一コースを見ながら、『じへ自然に話しかけてくる。

「でも三、四時間連續筋トレとか俺だつたら死ぬぞ」

だから俺もできるだけ自然に、いつも通りに答えることにした。

「そりや、ショウジョウちゃんが運動不足だから。そのくせに痩せすぎだるう」

「お前もな」

「ショウジョウちゃんより皮下脂肪ある自信あるよ」

毒舌だが、やつぱり弟は可愛い。そろそろいいかと思い、夕食に買ってきた牛丼を出してきて、一人で食べることにした。

最初は普通に会話してたんだ。皮下脂肪について、俺らジム行って筋肉つけてみようぜってなって、だったら皮下脂肪は減るだろうって話になつて。まあ他愛もない話だつたんだ。

「そろそろあーちゃんかえつてくるかなー、時間遅いよ」

俺は壁にかかった時計を見ながら囁つ。

「んな早くねえよ、花の女子高生なんだぜ?」  
「そりだよなー、でもあーちゃん可愛いから変な男にナンパされな

## いか心配

すれど、由紀は笑いながら俺に聞いた。

「俺はどうよ..」

本当に自然に、笑いながら尋ねてくるもんだから、地雷つて分かつても、俺は答えた。

「お前もすっげえ心配。可愛いんだもん。大好きだよ、ゆうちゃん由紀、泣きながら飯食つてた。俺の牛丼もじょっぱかった。塩かけすぎじゃねえの、吉野家.....」

あれ.....俺、本当に何してんだい。どうやら俺は、弟のことが本当に好きみたいなんだ。

涙ぼろぼろしてるので、一生懸命にそれをじらえて飯を食つてる弟の姿を見て、健氣でいたたまれなくなつて。どうしようかと思つてとりあえず手を握つたら、びっくりした顔をされた。

「いいのかよ。ショウチャさんは女が好きなんだい?」「ゆうちゃんの方が大切だから」

それでも由紀は興奮して、さうにまくし立て

「ふざけるなよー。俺は男で、弟なんだ。俺はショウチャさんの一番にまくし立て」

「うる

まつやすべて見つめる俺を見て、おつかんは口をつぐむ。

「うる……。俺もしちゃかひたの」と好きだよ

ボソッ と呟いて、その後はただ静かに飯を食べていた。

俺は、弟といのまま行くところまで行つてもいいかもしないこと

思った。

「どうして俺ら兄弟なんだ？」な。しかも男同士。どうしてどうして  
てつて考えると、神様つてやつが本当に憎くなる。

今日は三年分くらい弟を泣かせた。「ごめん。こんな駄目人間でご  
めん。俺は弟と付き合つことにする。弟が本当に必要だよ。誰より  
も好きだよ。誰よりも幸せでこゝくれよ、やつちやん。

けじめはきちんとつけようと思う。新しくやり直すために、この  
思いをしつかりと言葉にするために、これから何を言つべきか考え  
ないと……。

まず、きちんと気持ちを伝える。やつちやんが大好きで、ずっと  
傍にいたいということ。

そしてそこに至るまでの経緯を説明する。始めは別れようと思つ  
てたこと。でも色々考えて、感じて、自分でこの気持ちを確認して、  
やつぱり好きだと思ったこと。

それから最後に、やつぱり今はまだセックスはできない。俺が価  
値観を受け入れられるまで待つていてほしい、といつこと。お前の  
ことは好きだけどセックスは駄目つて、すぐこ自分に都合のいい考  
えで、勝手すぎると思う。でも弟とすると俺は罪悪感で自殺しかね  
ないから、それだけは待つていてもらいたい。以前ディープキスを  
した時だつて、吐きそうになつたくらいだから。

気持ちはあるつても、体がまだ受け入れようとしない現状で、やは  
りそれは難しい……と思つ。

夕食も終わり、自分の部屋へ戻つて漫画を読んでいた弟は、部屋  
に入ってきた俺に少し驚いていた。そのびくとした反応が可愛ら  
しくて、思わず笑つてしまつ。

「……」

無言で見つめられ、なんだか緊張するような恥ずかしきよつた、なんとも言いづらい雰囲気だ。

でも、言わなきや云わらないわけで。先ほど考えた内容を思い返しながら口を開いた。

「好き……なんだが」

「ありがと」

なんともそっけない返事。弟はきょとんとした顔をしていた。

「うん……」

どうもこいつ、「シチコーンで」、「いつ」とを並べての間に慣れていない俺は、どうしても上手く口から言葉が出てこない。とにかく、自分の思いをなんとか説明することにした。

「お前と一度やりかけただろ? 俺や、その時やるのは流石にないと  
思った」

「……」

弟は何も言わずに俺の話に耳を傾けていた。

「でも、色々考えた。お前が大好きだから、ゆきちゃんが大好きだからや。お前が幸せになる方法を探した

「……」

「俺みたいな駄目人間なんかと一緒にいるより、他の人が良いと…  
…そう思つたんだ。だから別れようつて言つたんだ」

「……つん

俺の言葉を聞いて、弟はゆっくりと頷く。

「でも、言った後にすげえ後悔したんだ。お前が泣いたのを見て、俺は何もしてやれないって。俺が求めてたのはこんなものだつたのかつて」

「……」

視線を逸らさず、俺は続けた。

「お前が離れてくのを感じて、だから俺、すじく苦しめて。俺にはゆうひちゃんが必要つて分かつて」

すると、俺の言葉をささやくよつて由紀が言った。

「しょうひちゃんは俺が好き?」

「ああ、好きだよ」

それを聞いて、弟も笑顔で言つ。

「俺も大好き」

少し照れるが、本当に嬉しかった。お互いにうやんと思いつえたといつことだ。

口下手な俺は上手く伝えることができないし、優柔不断で本当に駄目な兄貴で、ここまで来るので随分と時間がかかってしまったけれども。

「でもさ、俺童貞だからセックスは駄目。下手糞だから」

「素直に言えればいいものを……」

当然俺のそんな言い訳など、弟は見抜いているよ」つだ。

「はい、すみません。半分の本音です、半音です」

「うなだれる俺に、弟は優しく微笑んだまま言った。

「兄弟だから、だろ」

やはり賢い、ちゃんと分かってる。……まあ当然か。へたれな俺は、なかなかそれだけは言こづらくて。お前に言わせてごめんよ。

「時間はかかると思つ。でもさ、お前が嫌いってわけじゃない。そこの辺は勘違いすんなよ」

「キスはいいの？」

「オーケー」

返事を聞くのが早いか、顔を寄せてきて素早くキスをしてきた。そんな由紀がたまらなく愛しい。

全て言い終わった後、思わず俺たちはその場にへたり込んでしまつた。

「ふー、久々に心底疲れた」

「この駄目人間が」

由紀がベッドに転がった俺の腹をぱんぱんしてくる。その手には涙が溜まっていたが、俺はあえて何も言わなかつた。

「ショウタちゃんは俺のこと好き?」

「大好きだよ、可愛いやつたちやん」

それを聞いて本当に嬉しそうに笑いながら、俺の隣に寝そべつてくれる。

「大好きだよ、ショウちゃん。……奇跡みたい。今なら神様を信じられるかも」

「このキリストンが~」

「ちげえよ、俺はただ嬉しいだけ。ショウちゃん好きなだけ」

もう言つて俺の首元に顔を埋めてきたんだが、由紀はちょっとぴり泣いていた。その涙でまたシャツが湿つた。

本当に今日はよく泣いてるな。思わずその頭を思い切り抱きしめた。

## 秘めた思い

兄貴は昔から優しいだけの駄目人間だった。優しさだけじゃ世の中生きられないもんな。

兄貴が大学入ってすぐだったと思う。ふられたーつて泣いて帰ってきた。ふられたぐらいで泣くなよなって慰めてたんだけど。恋に落ちる瞬間つてあるよな。今まで見ていた世界が、急に鮮やかになる。同じ場所にいるはずなのに、一秒前とは全く違った世界になる。

兄貴がさ、俺を見上げたんだ。涙と鼻水まみれの汚い顔で。……その時から、ずっと好きだった。

俺はゲイだと思う。兄貴を好きになつてからは女が駄目になつた。兄貴を好きなのが嫌で仕方なくて、彼女を作つた。一緒にいて和む女子と、一度だけ付き合つた。でも、キスをした時に思わず吐いてしまつた。もう女をそういう対象としては見られない。

ちなみに本当のファーストキスは小六の時だつたといつことは兄貴には秘密だ。

高校は男つ気の多い学校だつたから、五人くらいから告られた。なぜか兄貴みたなタイプにばかり惚れられて、それがなんだか悲しかつた。

図書館で高い本棚から本を取り出す姿を見たときはきゅんつてなつた。ぐでんぐでんに酔つ払つた姿を、寝ぼけてだらしがない顔を、可愛いと感じた。体が大きいから抱きしめられるとほつとした。

でも、兄貴は女が好きだからというためらいがあつたから。まさかキスされるなんて夢にも思わなかつたし……。

だから酔つてキスされた時はチャンスだと思つたし、一度された時にはもう止められなかつた。

兄弟で恋愛なんてありえないし、やめるべきだと思った。報われないし、人間やめたくなる。たとえ俺たちみたいに上手くいったよう見えても、たとえばキスをして兄貴が吐きそになつた時は本当に辛かつた。

兄貴から別れたいって言われた時は、もう恋人どころか兄弟にも戻れないって死にたくなつた。三リットルくらいは泣いたと思う。あのままで、無理やり襲つていたかもしない。

兄貴は優しいから、すぐに流される。きっと俺に好きつて言つてくれるのだつて、ずっとじゃない。泣きたい。引き止められるなんでもするよ。

始めは普通の人生を送つて欲しいと思つてた。なんにも障害のない、ごく当たり前の人生。来年からは兄貴も社会人になるわけだし、身を引けるなら引きたい。俺なんてどうなつてもいいからさ。次男は男遊びしてもいいかもしれないけど、長男だから結婚とか大切だろう。

俺は兄貴の道を踏み外せてしまつたから、駄目かもしれないけど。でも妹には良い旦那さん見つけて子供作つて、幸せになつてほしい。

沢山悩んだし、本当に苦しかつた。今だつて本当にこれで良かつたのか分からぬ。

だけど……せめて今だけは、こうさせて欲しい。

「今日はすいじ日だつたな……」

ベッドの上で伸びをしながら俺は言った。思い返しても、色々ありすぎて大変な一日だった。肉体的にも精神的にも疲れているようだ、さすがに眠くなつてくる。

「だなあ、しおりちゃん」

弟は泣きすぎて喉が渇いたらしい。絶対にもう一度と、大事なゆうちやんを泣かせたくない。強く、そう思つ。甘えてゆうちやんが抱きついてきた。なんとなく、くすぐつたいよつな恥ずかしいような。でも、そんな由紀がたまらなく愛しい。

「構つて欲しいのかよ」

「うん、お願いします」

「じゃあ三秒、田つぶつて」

弟は言われたとおり瞳を閉じる。

「ゆうちやん、大好きだよ。おやすみ」

そう言つて、俺は彼に優しくキスをした。その途端、ゆうちやんの表情がふわっと笑顔に変わる。

「うん。今日はお疲れ様」

それを見て、思わず強くぎゅっと抱きしめる。あんまり力を入れ

すがして、「苦しこよ」って苦笑にされてしまったけど。

長かった一日が、ようやく終わった。明日から、俺はまたバイトと大学の、弟と妹は学校の日々が始まる。でも、これからはこれまでは違つ、新しい毎日が始まるんだ。

いつまでも家族みんな、そして誰よりもやつれやんが幸せでいらっしゃますように……。そう心の中で願いながら、俺たちはそのままゆっくつと眠りに落ちていった。

あれから俺たちは何度も口付けを交わした。さすがにまだセックスは出来ないけれども。

男同士であつて、兄弟であつて。性別の壁を壊して、ようやくひとりの人として愛し合おうと思つたら、兄弟の壁がある」とを再確認した。あまりの壁の多さに泣きたくなる。

男兄弟で恋愛だぜ？狂つてるよな。でも俺は弟が好きで、弟は俺以上に俺のことが好きなんだ。

家族愛とかそんなんじやない。倫理観を無視した恋つてのは知つてる。兄弟でこんなことしてるのは俺らだけだらうな……。

始めは弟との関係を思い出すたび、気持ちに反して吐いてばかりだつた。こんなにも弟が好きなのに、理性が、体が拒否してた。精神的にもヤバくて、自分の手首をじつと見つめてる時があつた。

実は、弟に別れを切り出した時、ポケットに睡眠薬が入つてたんだ。駄目だつたら死のうと思つて。自殺を考えてた俺は、かなり追い詰められてたんだと思つ。

兄弟間で恋愛つて難しいよ、死にたくなるよ。でも、支えてくれた人たち全てに感謝してる。今はもう、ゆうちゃん、あーちゃん、母さんを泣かせるようなことはしないつて誓つ。

弟妹は大切に、兄姉がいる奴らはたくさん甘えておけばいい。ひとつ屋根の下で生きてるつてとんでもない奇跡だからな。

みんなに、  
あつがとひ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5657m/>

---

俺は弟に恋をする。

2011年9月18日14時07分発行